

フラストレーション場面における他罰反応の年齢的变化

中野麻紀

問題と目的

日本版 P-F スタディ（児童用）の再標準化の研究 II（秦ら、2000）において、アグレッションの方向における反応傾向が従来の傾向と一致しないことが見出された。つまり、これまで各国における反応傾向は、現行日本版だけではなく原図版においてもほぼ一貫して年齢の増加と共に他責的方向が減少し、自責的・無責的方向は増加することが認められており（秦ら、2000）、この現象は社会的に好ましくない他責反応を抑制する社会化の現れであると解釈されてきた。

秦ら（2000）のデータを検討したところ、他罰反応が出現するのは 24 場面中 23 場面であり、その反応出現率の変化によって場面を以下の 3 つに分類できた。〔i. 他罰反応上昇場面群（以下、上昇場面群と略記）：加齢に伴い増加する群（場面 No. 6, 8, 10, 12, 13, 14, 19, 24） ii. 他罰反応下降場面群（以下、下降場面群と略記）：加齢に伴い減少する群（場面 No. 2, 4, 7, 9, 11, 16） iii. 他罰反応平坦場面群：加齢による変化が明らかでない群（場面 No. 1, 3, 5, 17, 18, 20, 21, 22, 23）〕

それぞれの場面の特徴を見ると、上昇場面群はほとんどが超自我阻害場面であり、下降場面群は他者によって遊びが阻害される場面であった。したがって、他罰反応が年齢の増加と共に上昇する傾向には自尊心を傷つけられ、フラストレーションを招く場面が関係しており、他罰反応が下降する傾向には人為的に遊びが中断・阻害され、フラストレーションを引き起こす場面が関係していると考えられた。

フラストレーションと攻撃性

Dollard, Doob, Miller, Mower, & Sears（1939 以下、Dollard らと略記）のフラストレーション-攻撃仮説によると、フラストレーションが常に攻撃を引き起こしたり、フラストレーションによってのみ攻撃が引き起こされたりするわけではないが、攻撃を行う状況に

は何らかのフラストレーションが存在すると考えられる。また、Dollard ら（1939）は、「フラストレーションの強度が一定ならば、ある攻撃活動に対する罰の予期が大きいほどその活動は起こりにくく、罰の予期が一定ならば、フラストレーションの強度が大きいほど攻撃活動が起こりやすい。」と述べている。P-F スタディにおいては、各場面群の図版だけで罰を予期することは困難であり、他罰反応出現率の変化は各群におけるフラストレーションの強度が関係していると推測される。つまり、上昇場面群においては高学年の生徒のほうが強くフラストレーションを感じており、一方下降場面群においては低学年の児童のほうが強くフラストレーションを感じていると考えられる。

自尊心の傷つきと加齢に伴う他罰反応出現率の上昇について

松田（1991）によると、自己認識の発達段階は、自己の内面へと視点が向けられる児童期を経て、独自の存在を問う青年期へ移行する。そして、このような過程の中で自己に対して強い関心を向けるようになる。また齊藤（1996）によると、形式的操作期に入り抽象的思考が可能になると、その思考は青年自身の内部にも向けられる。つまり、児童期から青年期にかけては、それまでとは異なり意識が個人の内部へも向けられ、自己への関心が高まる時期と言える。そのような過程の中で自己概念や自己像は形成されてゆくのであるが、「自己認知は他者からの認知の反映として生成していく（中西・鑑、1981）」ために、自己にとって他者は大きな存在となるだろう。

超自我阻害場面とは、自分に何らかの非がある状況で他者から殊更にそのことについて責め立てられる場面であり、名誉や体面が傷つけられ、自尊心が傷つくと予想される。

一方、児童期から青年期にかけては自己に対する関心が強まり、他者からの評価が大きな影響を持つ時期である。このような時期に自尊心を傷つけられることは、自己にとって非常に脅威な状況と推測される。し

たがって、これらの場面は年齢とともに強いフラストレーションを喚起し、その対応として攻撃反応が多く出現すると考えられる。

遊びの阻害と加齢に伴う他罰反応出現率の下降について

幼い子供は自分のお気に入りの玩具などに対しては非常に要求固執的であることから、遊びに対する欲求が強いことが推測される。加用 (1986) は、子供は大人が自己のプライドをかけて労働するのと同様、夢中になって遊んでいるとき、彼らは自己のプライドをかけて真剣に遊んでいるとしている。そのような状況における玩具の喪失やそれに伴う遊びの中断・阻害は、幼い子供に強いフラストレーションを喚起すると考えられる。しかし、成長し自己に対する認識が増すにつれ、要求固執的に遊びに没頭する程度が減少するため、高学年の生徒においてはそれほど強いフラストレーションを喚起されなくなると推測される。このようなことから、下降場面群における他罰反応出現率が低学年の児童において高く、学年が上がるにつれ減少してゆくのではないかと考えられる。

これまで自尊心の傷つきや遊びの阻害によって引き起こされたフラストレーションと他罰反応との関係について取り上げた研究は見当たらない。また、他罰反応、すなわち攻撃的行動と自尊心の傷つきとの関係を取り上げた研究も見当たらず、Baumeister ら (2000) が論文の一部に「暴力は、たびたびプライドが傷つけられるという感覚に起因するようである」と言及するにとどまっている。Baumeister ら (2000) によると、「自尊心 (self-esteem) と攻撃性 (aggression) の関係を扱った研究は、意外にもほとんど存在せず」、自尊心の高低と攻撃性との関係について扱った研究がわずかに存在しているという状態のようである。

〔目的〕

フラストレーション場面における他罰反応の加齢に伴う変化に関係すると思われる、自尊心傷つき場面と遊びの阻害場面における攻撃反応について検討し、これらの関係を明らかにする。

〔仮説〕

1. 高学年の生徒ほど自尊心傷つき場面において強いフラストレーションを喚起し、攻撃反応が多く出現するだろう。

2. 遊び阻害場面では高学年になるほどそれほど強いフラストレーションを喚起されないため、低学年の児童において多くの攻撃反応が出現するだろう。

研 究 1

目的

先行研究のデータによって確認された他罰反応による上昇群・下降群場面分類の信頼性について検討する。

方法

〈被験者と実施時期〉

大阪府下の小学2年～中学3年までの児童・生徒、計793名に対して2001年7月に実施した。有効回答率は87.3%で692名(小学生393名,中学生299名)。

〈尺度〉

秦ら(2000)による再標準化で用いられた日本版児童用P-Fスタディ(改訂版)を用いた。

〈手続き〉

事前に配布した実施法に従い、各クラスごとにクラス担任によって集団で実施された。スコアリングは、現行日本版の解説(林ら,1987)やローゼンツァイグP-Fスタディ児童用日本改訂版マニュアル(試案)などを参考に、専門家の指導も受けて、筆者によってなされた。各学年ごとにスコア不能(U)反応数を調べた結果、3つまでを有効なデータとして採用した。

結果

〈上昇場面群における他罰反応出現率について〉

上昇場面群における各被験者の他罰反応出現数を算出し、全場面数(8)で割り、比率を求めた(表1)。そして、各学年男女別に平均値と標準偏差を算出した。他罰反応出現率についての年齢的变化を見てみると、図1のような傾向が見られる。

図1からもわかるように、上昇場面群における他罰反応出現率は小学生より中学生の方が高く、徐々に増えつつあるようである。そこで、これらの他罰反応出現率について学年間に差があるのか、5(学年)×2(性別)の被験者間計画による分散分析を行った。その際分析は、出現率を逆正弦変換した値(度)を用いて行われた。その結果、学年の主効果($F_{(4,682)}=20.53$)が1%水準で有意であり、性別の主効果および交互作用は有意でなかった。LSD法を用いた多重比較(p

表1 各場面群における他罰反応出現率の平均と標準偏差

			〔上昇場面群〕		〔下降場面群〕	
学年	性別	人数	Mean	S. D.	Mean	S. D.
小2	男子	41	0.30	0.17	0.28	0.24
	女子	44	0.29	0.16	0.21	0.19
	平均	85	0.29	0.17	0.24	0.22
小3-4	男子	82	0.34	0.21	0.30	0.23
	女子	99	0.30	0.15	0.22	0.19
	平均	181	0.31	0.18	0.25	0.21
小5-6	男子	59	0.36	0.17	0.28	0.19
	女子	68	0.35	0.17	0.20	0.19
	平均	127	0.36	0.17	0.23	0.19
中1-2	男子	65	0.50	0.21	0.37	0.25
	女子	86	0.49	0.19	0.25	0.21
	平均	151	0.49	0.20	0.30	0.23
中3	男子	68	0.42	0.19	0.18	0.18
	女子	80	0.41	0.22	0.20	0.16
	平均	148	0.42	0.20	0.19	0.17

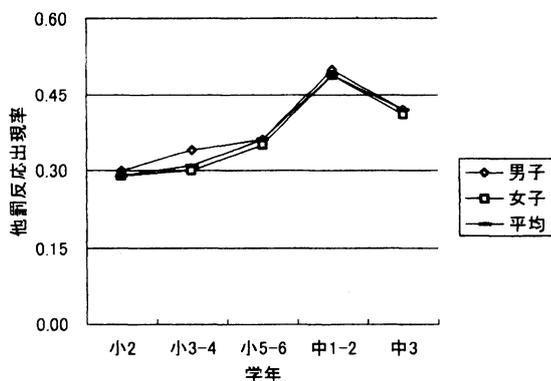


図1 上昇場面群における他罰反応出現率

<.05) によると、小学2年生と小学3-4年生の間には有意な差は見られず、小学5-6年生は小学2年生より有意に高く、中学生より有意に低くなるのがわかった。また、中学1-2年生は有意に最も高く、中学3年生は小学生より高いが中学1-2年生より有意に低くなるのがわかった。

次に、グラフ全体の傾向を確認するために1次～3次の回帰式を当てはめてみた。その結果、全ての式が有意であったが、決定係数が最も高かった3次式を採用した ($R^2=.01, F_{(3,688)}=25.32, p<.01$)。したがって、上昇場面群における他罰反応は学年が上がるにつれ上昇し、特にそれは小学生と中学生の間で顕著に見られるが、中学3年生では下がる傾向にあることがわかった。

<下降場面群における他罰反応出現率について>

下降場面群における各被験者の他罰反応出現数を算出し、全場面数(6)で割り、比率を求めた。そし

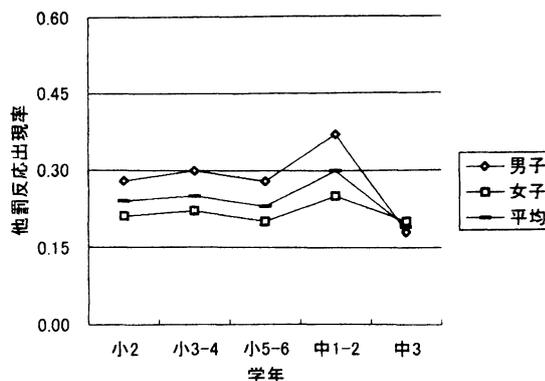


図2 下降場面群における他罰反応出現率

て、各学年男女別に平均値と標準偏差を算出した(表1)。他罰反応出現率についての年齢的变化をしてみると、図2のような傾向が見られる。

図2からもわかるように、下降場面群における他罰反応出現率には、上昇場面群と比べて、顕著な年齢的变化は何れもない。そこで、これらの他罰反応出現率について学年間に差があるのか、5(学年)×2(性別)の被験者間計画による分散分析を行った。その際分析は、出現率を逆正弦変換した値(度)を用いて行われた。その結果、学年×性別の交互作用 ($F_{(4,682)}=2.98$) が5%水準で有意であった。性別の各水準における学年の単純主効果を検定したところ、女子において有意でなかったが、男子において有意であった ($F_{(4,682)}=6.04, p<.01$)。LSD法を用いた多重比較 ($p<.05$) によると男子では中学3年生が最も低かった。また、学年の各水準における性別の単純主効果を検定したところ、小学2年生では有意傾向 ($F_{(1,682)}=2.69, p\leq.10$)、小学3-4年生と5-6年生では5%水準 (小3-4 $F_{(1,682)}=4.27$; 小5-6 $F_{(1,682)}=4.87$) で、中学1-2年生では1%水準で有意であり ($F_{(1,682)}=8.52$)、中学3年生では有意な差は確認されなかった。

以上より、下降場面群における他罰反応は中学3年生を除いては男子の方が女子より有意に高く出現する傾向にあるが、発達のな変化はないことがわかった。したがって、下降場面群では他罰反応に年齢が高くなるほど出現率が低下する傾向は確認されなかった。

研究 2

目的

フラストレーション場面における他罰反応の年齢的变化の要因として推測される自尊心傷つき場面、および遊び障害場面から成る質問紙を作成し、各要因と攻撃反応との関係について検討する。

方法

〈被験者と実施時期〉

研究1と同じ小・中学校、小学2・4・6年生の児童と中学2年生の生徒、計407名に対して2001年12月に実施した。

〈質問紙の構成〉

質問紙の構成は、以下のとおりである(付録参照)。

質問紙には、自尊心傷つき場面と遊び阻害場面を想定した計16の刺激文を用いた。刺激文は、架空のエピソードで各8ずつ作成された。自尊心が傷つけられる場面については、複数の文献(安食, 1977; 梶田, 1992; 森口, 1993)から主に河本(1996)を参考に、‘他者が介在しており、かつ自分が望ましいと思うように受け取ってもらえなかった状況’や‘他者が介在する状況で失敗や敗北を経験した状況’の要素を含ませた。遊びが阻害される場面については、小学校の教師や小学生の子供を持つ母親に聞き取り調査を行ったり、文献(坂西, 2000)を参考にしたりして最近の子供の遊びについて情報を収集し、それらが他者によって中断されたり、阻害されたりする場面とした。また刺激文の内容には、フラストレーションの原因が自己にある場合と他者にある場合(自己過失条件と他者過失条件)が組み合わされた。したがって、1. 自尊心傷つき・自己過失場面 2. 自尊心傷つき・他者過失場面 3. 遊び阻害・自己過失場面 4. 遊び阻害・他者過失場面の4場面、計16が設定された。

回答には、5種類の選択肢が提示された。選択肢には、主張的攻撃反応、攻撃反応、自責的反応、無責的反応、非主張的反応の5択した。それらが確かに5種類の反応を反映しているかについては、心理学を専攻する大学院生10名によって評価された。その結果、刺激文1・11・14を除くと一致率は88.9%であった。刺激文1・11・14については、ほとんど全ての評価者が‘攻撃反応’と設定した選択肢を‘主張的攻撃反応’と、‘主張的攻撃反応’と設定した選択肢を‘攻撃反応’と評価していた。その為、これらの選択肢を評価者によるものに再設定し、調査を行った。

〈手続き〉

各クラスごとに、筆者によって事前配布された手続きに従って、クラス担任によって集団で実施された。その際小学生では、教師が教壇で刺激文を1つずつ読み上げ、生徒が5択のうち1つに回答したことを確認した後、次の刺激文が読み上げられた。

〈得点化〉

5種類の各反応について場面ごと(場面I; 自尊心

傷つき・自己過失場面 場面II; 自尊心傷つき・他者過失場面 場面III; 遊び阻害・自己過失場面 場面IV; 遊び阻害・他者過失場面)の合計点を算出し、各条件に含まれる刺激数(4)で割ったものを反応得点とした。

結果

自尊心傷つき・自己過失場面、自尊心傷つき・他者過失場面、遊び阻害・自己過失場面、遊び阻害・他者過失場面における主張的攻撃、攻撃、自責、無責、非主張の5つの反応得点を学年別、性別に集計し、平均値を算出した結果を表2に示した。

1. それぞれの場面における各反応について

主張的攻撃、攻撃、自責、無責、非主張の5つの反応得点それぞれについて4(学年)×2(性別)×4(場面)の混合計画による分散分析を行った。その際、分析には各反応得点を逆正弦変換した数値(度)を用いた。その結果、主張的攻撃反応では場面×学年の交互作用が1%水準で有意であった($F_{(9,1197)}=5.26$)。その他の交互作用及び性別の主効果は有意でなかった。

攻撃反応と自責反応でも場面×学年の交互作用(攻撃; $F_{(9,1197)}=4.04$, $p<.01$ 自責; $F_{(9,1197)}=6.52$)が有意であった。しかし、無責反応ではいずれの交互作用も見られず、それぞれの主効果が有意であった(学年; $F_{(3,399)}=4.24$, $p<.05$ 場面; $F_{(3,1197)}=29.51$, $p<.01$ 性別; $F_{(3,399)}=10.90$, $p<.01$)。また、非主張反応でも交互作用は見られず、学年と場面の主効果が有意であった(学年; $F_{(3,399)}=6.98$, $p<.01$ 場面; $F_{(3,1197)}=12.32$, $p<.01$)。本研究では、設定された場面で年齢の変化による反応の違いが重要であるので、以下、交互作用が見られた3反応について述べる。

〈主張的攻撃反応について〉

主張的攻撃反応について4(学年)×2(性別)×4(場面)の混合計画による分散分析を行った。その結果、場面×学年の交互作用が1%水準で有意であった($F_{(9,1197)}=5.26$)。その他の交互作用及び性別の主効果は有意でなかった。そこで、まず、学年ごとにおける場面の単純主効果を検定した。その結果、すべての学年で場面の単純主効果は1%水準で有意であった(小2 $F_{(3,397)}=74.19$; 小4 $F_{(3,397)}=29.06$; 小6 $F_{(3,397)}=49.06$; 中2 $F_{(3,397)}=42.59$)。LSD法を用いた多重比較($p<.05$)によると、遊び阻害場面(場面3, 4)における主張的攻撃反応は中学2年生を除きその出現に有意な差は見られないが、自尊心傷つき場面ではすべて

表2 それぞれの場面における各反応得点の平均 (S. D.)

場 面	学 年 別 性 人 数	小2		小4		小6		中2	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
		60	68	15	16	52	55	66	75
自尊心傷つき 自己過失	主張的攻撃	0.12 (0.17)	0.05 (0.12)	0.08 (0.17)	0.08 (0.15)	0.17 (0.19)	0.15 (0.18)	0.22 (0.24)	0.20 (0.21)
	攻 撃	0.16 (0.15)	0.14 (0.14)	0.20 (0.14)	0.27 (0.14)	0.24 (0.19)	0.19 (0.17)	0.21 (0.21)	0.20 (0.23)
	自 責	0.44 (0.30)	0.47 (0.24)	0.35 (0.25)	0.33 (0.21)	0.26 (0.25)	0.30 (0.24)	0.21 (0.20)	0.24 (0.22)
	無 責	0.22 (0.24)	0.26 (0.22)	0.18 (0.19)	0.31 (0.23)	0.23 (0.20)	0.21 (0.19)	0.19 (0.19)	0.20 (0.20)
	非 主 張	0.06 (0.16)	0.08 (0.13)	0.18 (0.28)	0.02 (0.06)	0.10 (0.16)	0.15 (0.22)	0.17 (0.27)	0.16 (0.22)
自尊心傷つき 他者過失	主張的攻撃	0.40 (0.24)	0.47 (0.28)	0.60 (0.24)	0.59 (0.25)	0.60 (0.25)	0.51 (0.25)	0.45 (0.26)	0.52 (0.22)
	攻 撃	0.15 (0.22)	0.08 (0.14)	0.02 (0.06)	0.03 (0.08)	0.16 (0.21)	0.10 (0.16)	0.21 (0.23)	0.14 (0.18)
	自 責	0.21 (0.18)	0.22 (0.22)	0.18 (0.14)	0.17 (0.17)	0.08 (0.16)	0.13 (0.16)	0.10 (0.15)	0.07 (0.12)
	無 責	0.18 (0.19)	0.19 (0.21)	0.10 (0.15)	0.11 (0.15)	0.12 (0.15)	0.17 (0.20)	0.11 (0.17)	0.14 (0.16)
	非 主 張	0.06 (0.12)	0.04 (0.10)	0.10 (0.20)	0.09 (0.15)	0.05 (0.11)	0.09 (0.15)	0.13 (0.20)	0.13 (0.17)
遊び阻害 自己過失	主張的攻撃	0.39 (0.28)	0.41 (0.27)	0.38 (0.26)	0.33 (0.25)	0.38 (0.23)	0.35 (0.27)	0.33 (0.24)	0.39 (0.24)
	攻 撃	0.20 (0.24)	0.15 (0.20)	0.17 (0.17)	0.13 (0.18)	0.27 (0.22)	0.11 (0.19)	0.20 (0.23)	0.11 (0.16)
	自 責	0.08 (0.19)	0.10 (0.16)	0.05 (0.10)	0.06 (0.11)	0.04 (0.10)	0.13 (0.18)	0.07 (0.13)	0.08 (0.13)
	無 責	0.21 (0.24)	0.25 (0.24)	0.20 (0.26)	0.42 (0.33)	0.19 (0.22)	0.24 (0.23)	0.25 (0.26)	0.19 (0.21)
	非 主 張	0.12 (0.20)	0.09 (0.19)	0.20 (0.23)	0.06 (0.11)	0.12 (0.16)	0.18 (0.23)	0.15 (0.19)	0.23 (0.23)
遊び阻害 他者過失	主張的攻撃	0.36 (0.26)	0.34 (0.21)	0.48 (0.30)	0.38 (0.23)	0.41 (0.25)	0.38 (0.23)	0.50 (0.29)	0.45 (0.31)
	攻 撃	0.10 (0.17)	0.06 (0.12)	0.13 (0.18)	0.05 (0.10)	0.18 (0.22)	0.10 (0.17)	0.13 (0.17)	0.16 (0.19)
	自 責	0.15 (0.19)	0.15 (0.18)	0.05 (0.10)	0.09 (0.17)	0.06 (0.13)	0.08 (0.14)	0.08 (0.14)	0.02 (0.07)
	無 責	0.30 (0.27)	0.36 (0.25)	0.28 (0.26)	0.42 (0.23)	0.30 (0.25)	0.34 (0.23)	0.21 (0.23)	0.24 (0.25)
	非 主 張	0.09 (0.19)	0.08 (0.17)	0.05 (0.14)	0.06 (0.14)	0.05 (0.12)	0.10 (0.15)	0.08 (0.15)	0.13 (0.21)

の学年で有意な差が見られ、場面2が場面1より一貫して高かった。また、場面1は他のどの場面より有意に得点が低かった。次に、場面別に学年の単純主効果を検定した結果、場面1 ($F_{(3,399)}=11.01$)、場面2 ($F_{(3,399)}=5.56$)、そして場面4 ($F_{(3,399)}=4.45$) が1%水準で有意であった。LSD法を用いた多重比較 ($p<.05$) によれば場面1では高学年のほうが低学年より得点が高い。また場面2では、小学2年生より小学4年生のほうが有意に高くなるがそれ以降徐々に下がり、中学2年生の得点は小学4年生より有意に低く、小学2年生との間には有意差はなかった。場面4では小学2年生より中学2年生のほうが有意に

高く得点した。図3は、各学年ごとにそれぞれの場面について、主張的攻撃反応得点の平均値を示したものである。

〈攻撃反応について〉

攻撃反応について4(学年)×2(性別)×4(場面)の混合計画による分散分析を行った。その結果、場面×学年の交互作用 ($F_{(9,1197)}=4.04$ $p<.01$) が有意であった。そこで、まず、場面の各水準における学年の単純主効果を検定した。その結果、場面1 ($F_{(3,399)}=3.58$)、場面2 ($F_{(3,399)}=6.89$)、そして場面4 ($F_{(3,399)}=4.61$) で学年の単純主効果が1%水準で有意であった。LSD法による多重比較の結果 ($p<.05$)、場面1

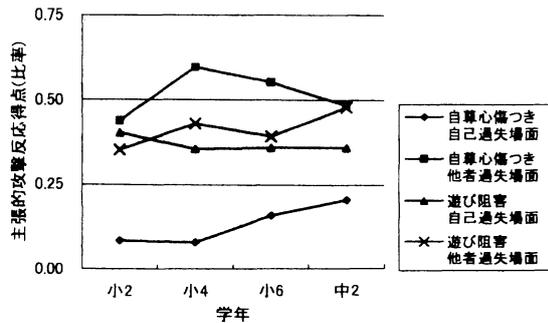


図3 主張的攻撃反応についての場面と学年の関係

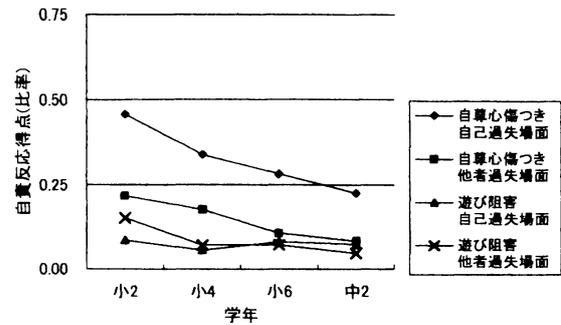


図5 自責反応についての場面と学年の関係

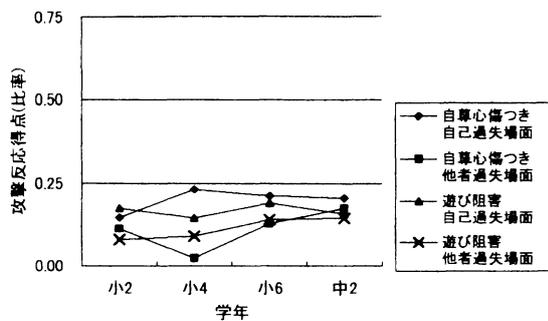


図4 攻撃反応についての場面と学年の関係

では小学2年生の得点が小学4・6年生より有意に低かった。場面2では、小学4年生の得点が有意に最も低いが、中学2年生は小学2年生より有意に高くなることわかった。また場面4では、小学6年生と中学2年生が小学2年生より有意に高かった。次に、学年の各水準における場面の単純主効果を検定した。その結果、すべての学年が1%水準で有意であり(小2 $F_{3,397} = 10.53$; 小4 $F_{3,397} = 12.16$; 小6 $F_{3,397} = 7.85$; 中2 $F_{3,397} = 3.53$)、LSD法を用いた多重比較によれば($p < .05$)、自尊心の傷つきや遊びの阻害を問わず、他者過失条件より自己過失条件のほうが有意に高くなるが多かった。図4は、各学年ごとにそれぞれの場面について、攻撃反応得点の平均値を示したものである。

〈自責反応について〉

自責反応について4(学年)×2(性別)×4(場面)の混合計画による分散分析を行った。その結果、場面×学年の交互作用が1%水準で有意であった($F_{9,1197} = 6.52$)。その他の交互作用および性別の主効果は有意でなかった。そこで、まず、場面の各水準における学年の単純主効果を検定した。その結果、場面1($F_{3,399} = 21.59$)、場面2($F_{3,399} = 16.62$)、そして場面4($F_{3,399} = 12.55$)が1%水準で有意であり、LSD法を用いた多重比較($p < .05$)によると場面1では中2=小6<小4<中2であった。また場面2では、中2=

小6<小4=小2であった。そして、場面4では中2=小6=小4<小2であった。次に、学年の各水準における場面の単純主効果を検定した。その結果、すべての学年が1%水準で有意であり(小2 $F_{3,397} = 81.46$; 小4 $F_{3,397} = 13.84$; 小6 $F_{3,397} = 24.64$; 中2 $F_{3,397} = 23.57$)、LSD法を用いた多重比較($p < .05$)によれば小学2年生では場面3<場面4<場面2場面1であった。小学4年生では場面3=場面4<場面2<場面1、小学6年生では場面4=場面3=場面2<場面1であった。そして中学2年生では、場面4=場面3<場面2<場面1となり、どの学年においても場面1が最も有意に高かった。図5は、各学年ごとにそれぞれの場面について、攻撃反応得点の平均値を示したものである。

2. P-Fスタディの上昇場面群における他罰反応との関係について

〈他罰反応と自尊心傷つき場面における主張的攻撃反応について〉

上昇場面群における他罰反応出現率を従属変数とし、3(学年)×2(性別)×2(主張的攻撃得点上位・下位群)の被験者間計画による分散分析を行った。なお、主張的攻撃反応得点における上位・下位群は、全学年を通しての平均値を用い、各学年を2分割して設定した。その結果、学年の主効果が1%水準で有意であった($F_{2,276} = 23.81$)。交互作用及びその他の主効果は有意でなかった。学年の主効果についてLSD法による多重比較($p < .05$)を行ったところ小2<小6<中2となり、学年が高いほど他罰反応出現率も高くなることを見出された。図6は、各学年ごとに自尊心傷つき場面における主張的攻撃反応得点の上位群と下位群について、研究1でのP-Fスタディ他罰反応上昇群における反応出現率の平均値を示したものである。

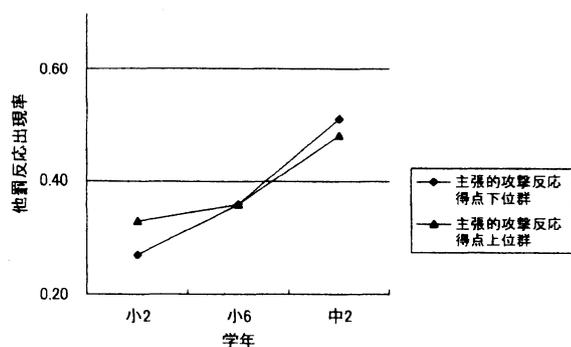


図6 上昇場面群における他罰反応と自尊心傷つき場面における主張的攻撃反応・学年の関係

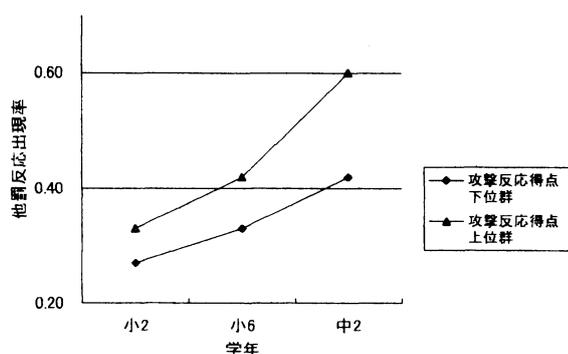


図7 上昇場面群における他罰反応と自尊心傷つき場面における攻撃反応・学年の関係

〈他罰反応と自尊心傷つき場面における攻撃反応について〉

他罰反応得点を従属変数とした3(学年)×2(性別)×2(攻撃反応得点上位・下位群)の被験者間計画による分散分析を行った。なお、攻撃反応得点における上位・下位群は、全学年を通しての平均値を用い、各学年を2分割して設定した。その結果、学年の主効果($F_{(2,276)}=24.54$)と攻撃反応得点の主効果($F_{(1,276)}=13.61$)がそれぞれ1%水準で有意であった。学年の主効果についてLSD法による多重比較($p<.05$)を行ったところ小2<小6<中2となった。また、攻撃反応得点の主効果について多重比較($p<.05$)を行ったところ下位群<上位群となった。したがって、他罰反応得点は高学年ほど高くなり、しかも自尊心傷つき場面における攻撃反応と関係することがわかった。よって、自尊心傷つき場面の効果が支持され、学年が高いほうが自尊心を傷つけられることによるフラストレーションを強く喚起され、他罰反応が高くなることが示された。図7は、各学年ごとに自尊心傷つき場面における攻撃反応得点の上位群と下位群について、研究1でのP-Fスタディ他罰反応上昇群における反応出現率の平均値を示したものである。

3. P-Fスタディの下降場面群における他罰反応との関係について

〈他罰反応と遊び阻害場面における主張的攻撃反応、攻撃反応について〉

他罰反応得点を従属変数とした3(学年)×2(性別)×2(主張的攻撃反応得点上位・下位群)の被験者間計画による分散分析を行った。なお、上位・下位群については自尊心傷つき場面の際と同様の手続きを行った。その結果、性別の主効果($F_{(1,276)}=4.70$)が5%水準で有意であり、女子よりも男子の方が他罰反応を表出することがわかった。また、他罰反応得点を従属変数とした3(学年)×2(性別)×2(攻撃反応得点上位・下位群)の被験者間計画による分散分析も行ったが、いずれの主効果も交互作用も有意でなかった。

考 察

上昇場面群における他罰反応の年齢的变化

秦ら(2000)のデータを検討した結果、上昇場面群における他罰反応のグラフには3次式の当てはまりが最もよいことが確認されており、図1と形状が近似している。前研究の被験者数は約2900名であった。一方、本研究の被験者数は約700名であり、前者の25%にも満たない。また、調査条件も異なっている。前研究は「共同研究者を中心とした経験者を検査者とし、他の心理職や大学で心理学を専攻している大学院生や学生を補助者として集団で実施(秦ら, 2000)」された。一方、本研究は各クラス担任を検査者とし、事前配布された書面を参考に集団で実施された。それにもかかわらず、非常に似通ったグラフ傾向が確認されたことは注目に値する。つまり、上昇場面群における他罰反応は学年が上がるにつれて上昇し、特にそれは小学生と中学生の間で顕著に見られるが、中学3年生では下がる傾向にある。しかもその傾向は比較的安定性があり、かなり一般化できると言えるだろう。

小学生と中学生の間で他罰反応出現率が急激に伸びることについては、思春期に差し掛かり視点が内部へ向かうことと自尊心を傷つけられることとの関係予測と一致しており、緩やかな一定上昇よりむしろこちらのほうが自我の目覚めを顕著に感じさせられる。一方、中学1, 2年生で顕著に上昇し中学3年生で下降するという特徴的な変化については、前述の予測では説明できない現象である。恐らく、自尊心を傷つけられても攻撃反応を表出しないような、反応表出と拮抗するような要因が働いていると考えられる。理論的根

扱はないが、現職教師の見方によると、中学2年生と中学3年生では思考や行動に大きな違いがあり、急に落ち着いたり成熟した印象を受けたりして驚かされることがあるそうである。発達的に成熟することによって何かの要因が加わり、それまで表出していた攻撃反応が抑制される。もし、怒り感情を測定すればそのまま上昇したかもしれない。つまり、中学2年生と中学3年生の間にはひとつの発達の転機があり、それがグラフの傾向に現れたと考えられる。

また、中学3年生において下降する現象には、社会的環境も関係しているかもしれない。つまり、‘高校受験を控える学年’としての社会的環境に対する積極的適応である。北村(1972)によると、積極的適応とは、その成員に迎え入れられ、承認されることによって優位を得ようと、相手に受け入れられ、重んぜられる能力や態度などを増強する方向に自己の行動を形成し、その社会集団に適応するやり方である。高校受験には学業成績以外に内申書による評価も関係する。内申書の評価は、実際のところ生活態度によって内申書の評価が左右されることはない。しかし、普段生活態度があまり思わしくない生徒の場合、たとえば授業中にいつも居眠りをしているような場合には、授業内容を聞いていないわけで、試験などをするとあまり点数を取れないということがある。したがって、普段の生活態度が学業成績に影響を及ぼすという意味において、内申書の評価は学校生活における生活態度に対する評価であるという認識がなされ、中学3年生になると内申書の評価を気にしてそれまでの素行を改めるといふことがある。このような行動変容は、学校生活に対する積極的適応と考えられる。つまり、内申書において良い評価を得るために、学校という社会集団に受け入れられ、重んぜられる能力や態度などを増強する方向に自己の行動を形成し、適応しようとしているのである。P-Fスタディにおける他罰反応とは、非難や敵意を周囲の人々に向けた攻撃行動であり、一般に社会的には好ましくないとされる行動である。したがって、中学3年生では出現率が減少するのではないだろうか。しかし、いずれにせよ、中学3年生において他罰反応が減少する傾向については今後研究できそうなテーマである。

下降場面群における他罰反応の年齢的变化

秦(2000)のデータでは、学年と性別の主効果は確認されているが、交互作用は見られず、出現率は全体的に男子が女子より多く、小学2年生がいずれの学年

よりも顕著に多く、その後は緩やかに減少するグラフであったが、本研究では学年による変化はほとんど見られず、先行研究のデータとは異なる結果となった。恐らく、下降場面群における他罰反応はサンプルの大きさや環境の違い、また条件の違い等に影響を受けると考えられる。したがって、下降場面群における他罰反応は、上昇場面群と比べると、比較的安定性を欠いた傾向であると考えられる。

自尊心傷つき場面における各反応の年齢的变化

自尊心の傷つきと学年、性別それぞれの要因が各反応にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。その結果、自尊心傷つき場面における攻撃的な反応得点は高学年の方が高くなる傾向にあることが見出された。加えて、自責的反応得点は学年が上がると減少する傾向にあるという、予測外の結果も得られた。また、自尊心傷つき・自己過失場面と自尊心傷つき・他者過失場面では攻撃的な反応得点の出現傾向が異なることを見出した。つまり、主張的攻撃反応は他者に非がある場合の方が高く得点するが、それは上昇傾向を示さず、年齢に関係なく全体的に高くなる傾向にあった。また、攻撃反応得点は、自己に非がある場合も、また他者に非がある場合にも加齢に伴い上昇する傾向にあり、得点としては自己に非がある場合の方が高くなることを見出された。そして、自責的反応得点は、どちらの場合も加齢に伴い下降する傾向にあり、得点としては自己に非がある場合の方が高くなることを見出された。

以上の結果から、自尊心を傷つけられる状況では年齢が高い生徒ほど攻撃反応を表出しやすくなることが予想される。しかもそれは、自らの非を殊更に責め立てられる状況において顕著に現れるだろう。つまり、他者が介在する場面において好ましく評価されなかったり、失敗や敗北を経験したりすることによって体面が傷つくような状況に陥っても、他者の方に非がある場合には、そのことについて指摘や非難をして、自己の言い分を主張する反応(主張的攻撃反応)をとる傾向にあり、安易に他者を攻撃する傾向は低いことがうかがえる。一方、他者が介在する場面において自らの非を強く非難・叱責され、自尊心を傷つけられるような状況では、感情的に相手を攻撃する傾向(攻撃反応)がうかがわれる。また、自己の非を認めることによってその場に対応しようとする傾向(自責反応)は、やはり自らに非がある場合の方が他者に非がある場合よりは出現しやすい傾向にあるが、それでも学年

が上がるにつれて反応が減降する傾向にあることから、年齢が上がると体面を傷つけられてまで自責的に状況を治めようとするのでは感情が納まりきらず、他者を攻撃するということが考えられる。このような行動は、大淵（2000）の言う「防衛的自己呈示」ではないだろうか。防衛的自己呈示とは、名誉や体面が傷つけられ、面目を失いそうになる場面において試みられる攻撃である（大淵，2000）。つまり、他者からの非難は否定的なイメージを個人に押し付けるものであり、それに対して何も反発しないということは、そうした負のイメージを受け入れることになるため、人々は怒りを示したり反撃を行ったりすることによって負のイメージを否定し、自己同一性を守ろうとする、というのである。本研究の結果に則して考えれば、他者からの非難が間違った非難である場合にはそのことを指摘する程度の攻撃で済ませることが出来る。一方、自らに非がありそのことについて殊更に非難されるような状況では、その非難に対して自責的に対応してはその他者による否定的イメージを自己に押し付けられることになる。そのような自己に対する否定的イメージは、「人から良く思われたい」という欲求と相反するものであるために、自己に対する認識が高まりつつある時期においては、それ以前の時期よりも強いフラストレーションを感じるであろう。そのため、高学年になるにしたがって攻撃反応が出現しやすくなると考えられる。

そして、研究1において確認されたP-Fスタディの上昇場面群における他罰反応出現率と自尊心傷つき場面における主張的攻撃対応得点と攻撃対応得点との関係をそれぞれ検討したところ、攻撃反応得点と他罰反応出現率に関係があることが見出された。そのことから、他罰反応が上昇する傾向には、自らの非を他者から殊更に責め立てられ、自尊心を傷つけられるという要因が関係していると考えられた。

遊び阻害場面における各反応の年齢的变化

遊びの阻害と学年、性別が自尊心傷つき場面における反応にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。その結果、遊び阻害場面における主張的攻撃反応得点と攻撃反応得点には学年による一定の顕著な変化は認められず、仮説2は支持されなかった。また、攻撃反応得点については場面と性別の交互作用が確認され、遊び阻害場面で女子より男子のほうが有意に高く得点することが見出された。研究1の下降場面群においても男子の他罰反応出現率が女子より有意に高かつ

たことからこのような傾向は共通しているが、学年が高いほど攻撃的な反応が減少するという傾向は確認されなかった。このような結果になったことについてはいくつかの原因が考えられるであろうが、まず1つ目は他罰反応が下降するという傾向自体の不安定さである。研究1においても下降場面群において他罰反応得点が増加に伴い下降する傾向が認められなかったように、他罰反応の下降傾向は被験者の数や地域、被験者の特徴など環境変数や有機体変数の影響を強く受ける可能性が示唆されている。そのため、他罰反応の下降場面から導き出した場面要因である‘遊びの阻害’もそれらの変数の影響を受けることが考えられる。したがって、これらの傾向を確認するにはかなり厳密に変数を統制して検討してみる必要があるだろう。

また、P-Fスタディの下降場面群における他罰反応出現率と遊び阻害場面における主張的攻撃反応、攻撃反応得点それぞれとの関係を検討したが、遊び阻害場面の各反応の効果によって他罰反応の変化は見られなかった。したがって、研究2で用いた刺激文の妥当性についても検討する必要があるだろう。フラストレーションが喚起されるよう刺激文を構成した。しかし、下降場面群において阻害されていた遊びは玩具を用いたかなり幼い遊びであった。つまり、そのような遊びが研究2で用いた質問紙に厳密に反映されていたかという問題である。刺激文の作成にあたっては、その点にかなり注意したつもりであったが、子供の観点に立てば遊びの性質が異なっていたのかもしれない。したがって、今後研究にあたってはこれらの点についてかなり考慮する必要があるだろう。

結 論

本研究は、フラストレーション場面における他罰反応の年齢的变化について検討した。その結果、年齢による上昇傾向には、自らの非を強く非難・叱責され自尊心を傷つきされるという要因が関係するということが明らかにされた。他者が介在する状況で、自己の過失について殊更に責め立てられることは高学年の生徒に強いフラストレーションを引き起こし、自責的な対応では感情が納まらず、他者を攻撃するようである。一方、他罰反応が下降する傾向については確認されず、それに関係する要因についても明らかにすることは出来なかった。そのことにより、他罰反応が下降する傾向は様々な環境変数や固体変数の影響を受けやすく、不安定である可能性が考えられた。またそのこと

が、遊びの阻害場面における攻撃的反応に下降傾向が認められないということにもつながっていると推測される。しかし、遊びの阻害場面において攻撃的反応の下降傾向が認められないことには、新たに作成した刺激文で阻害されている遊びの質にも問題があったと考えられる。したがって、今後の研究においては、変数の統制と遊びの質の検討を厳密に行なうことが必要であると考えられる。

文 献

安食正夫 1977 プライド 中央公論社。
 Baumeister, R. F., Bushuman, B. J., and Campbell, W. K. 2000 Self-Esteem, Narcissism, and Aggression: Does Violence Result From Low Self-Esteem or From Threatened Egotism? CURRENT DIRECTIONS IN PSYCHOLOGICAL SCIENCE 9(1) 26-29.
 Dollard, J., Miller, N. E., Doob, L. W., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. 1939 *Frustration and Aggression* New Haven: Yale University Press. 宇津木保 (訳) 1959 フラストレーションと暴力 誠信書房。
 秦 一士・笹川宏樹・西川 満・西尾 博・中澤正男・津田浩一・一谷 彊・林 勝造 2000 日本版 P-F スタディ (児童用) の再標準化の研究Ⅱ: スコアリングの信頼性, 評点因子とカテゴリーの標準値, GCR 評点 人間科学年報 第25号 甲南女子大学人間科学会。

林 勝造 1986 P-F 反応の文化交叉比較研究 一谷 彊・林 勝造『投影法の基礎的研究』Pp. 161-179。
 林 勝造・住田勝美・一谷 彊・中田義朗・秦 一士・津田浩一・西尾 博・西川 満 1987 P-F スタディ解説 三京房。
 梶田叡一 1992 自己意識の心理学 [第2版] 東京大学出版会。
 河本いずみ 1996 自尊心経験についての調査研究—リアリティの所在の観点から— 心理学研究 第67巻 第2号 Pp. 102-109。
 加用文男 1986 ルール遊びと子供のプライド 心理科学 第10巻 第1号 Pp. 23-32。
 北村晴朗 1972 適応の心理 誠信書房。
 松田 惺 1991 自己・自我 無藤 隆・高橋恵子・田島信元 (編) 発達心理学入門Ⅰ—乳児・幼児・児童 東京大学出版会 Pp. 210-222。
 森口兼二 1993 自尊心の構造 松籟社。
 中西信男・鐘幹八郎 1981 心理学 10 自我・自己 有斐閣 Pp. 87-116。
 大淵憲一 1987 攻撃の動機と対人機能 心理学研究 第58巻 第2号 Pp. 113-124。
 大淵憲一 2000 攻撃と暴力 丸善ライブラリー。
 斎藤誠一 1996 青年期の人間関係を理解するための基礎 人間関係発達心理学 4 青年期の人間関係 培風館 Pp. 1-18。
 坂西友秀 2000 あそびと友だち 児童心理 第54巻 第4号 Pp. 35-39。

付録 研究2で用いた刺激文 (一部)

場面	過失	刺 激 文	回答選択肢					
			主張的攻撃反応	攻撃反応	自責反応	無責反応	非主張的反応	
I	自尊心傷つき	自己	Sちゃんは算数のテストの点がよくありませんでした。でもお家に帰ってそのテストをお父さんに見せました。するとお父さんは「小さい弟よりだめだな」と弟の前でSちゃんに言いました。	「そんな言い方しなくてもいいじゃないか!」と言う	「お父さんのバカ!」と言う	「ごめんなさい。次からはもっと頑張ります。」と言う	「自分なりに頑張ったんだけど出来なかったんだ」と言う	黙っている
II	自尊心傷つき	他者	Sちゃんは手を洗ってからおやつを食べていました。でもお母さんは「ちゃんと手を洗ったの?」とSちゃんに言いました。	「ちゃんと洗ったよ!」と言う	「うるさいな!」と言う	「ごめんなさい」	「じゃあもう一度洗うね」と言う	黙っている
III	遊び阻害	自己	カルタ大会でSちゃんはカルタを取ろうと頑張りました。でも隣のお友達ばかりが取ってしまいました。そしてSちゃんは1枚も取ることができませんでした。	「もう1回やろうよ!」と言う	「1枚くらいくれたっていいじゃないか!」と言う	「僕はカルタが下手だな」と言う	「みんなカルタが上手だね」と言う	黙っている
IV	遊び阻害	他者	Sちゃんはおもちゃをお友達に貸してあげました。でもお友達から返してもらったとき、その人形は少し壊れていました。	「人形壊したでしょ!」と言う	「君の人形も壊すぞ!」と言う	「君に貸す前から壊れていたんだよ」と言う	気にしない	黙っている

(注) No. は実際の刺激文提示順序と等しくない。刺激文と回答選択しそれぞれは乱数表を用いたランダム順で質問紙としてまとめられた。